Ｄ－1　成果と課題（日本）

①成果

何より、海外との交流経験のない子どもたちであったが、なぜ英語を学ぶか考えたり、広く地球全体を見つめ、よさや問題点を考えたり、その考えは自分たちだけの思いか？と投げかけ、外国の人たちの思いを聞いてみたいと思うようしかけることで、国が違っても夢や願いを持ってみなそれぞれの地でそれぞれの文化を大事に生活していることに親近感を覚えたようである。この子達が大人になる頃にはますます国と国の垣根は低く、今以上にコミュニケーションの力が求められる。しかしながら興味のあるものにしか目が向かなかったり、他との関わりを億劫に感じ、関わりを苦手とする様子も垣間見られるので、本実践はよい経験となったようだ。台湾の子たちは元気で物怖じせず、カメラに向かって手を振り、自信を持って言葉をかけてくる。送られてきた手紙やカードは中国語や英語で書かれており、大いに刺激を受けた。こまめに学習の様子を撮った写真をメールに添付して送り合ったので、常に相手を意識し、意識を持続させることができた。台湾の子たちの丁寧なまとめに触発され、
「ぼくたちももっと丁寧にまとめなくては･･･」
とよりよいものにしようと作りかえる姿も見られた。

また、自国や金沢や自分達のことを見つめ、他国へ目が向いたことも大きな成果である。
ドイツの方々との交流で、ドイツと聞いてイメージすることを交流の実行委員の子どもたちがアンケートを採った。６年生のイメージは　サッカーワールドカップ開催国・ビールで有名・フランクフルトソーセージ等だったが、中には肌の色が黒い、暑い国等、様々な思いこみがあったようだ。世界地図への親しみも薄かったのが現状だった。しかし、ドイツやメキシコ、台湾と、歴史学習で触れたり、調べたり、実際にお会いしてお話を聞いたりする中で、初めて知ったことがたくさんあり、また他の国への関心や「行ってみたい」気持ちにまでつながっていった。アートマイル事務局のホームページから取り込み、子どもたちに見せた多くの交流国の絵には、必ずしも夢や希望でいっぱいのものばかりではなく、不安や悲しみが表現されたものもあった。しかし、その現実を背負い、願っていることはきっとぼくたちと一緒なんだ、と確信できる学びの時間でもあった。

４学級を横断的に、興味関心別の４つのプロジェクトに分かれたことで、それぞれ他のプロジェクトの人たちに自分たちの関わってきた過程や学んだことをわかりやすく伝える必要感が増した。ＰＣも活用し、多くの情報から、必要なものを取捨選択し、聞き手の反応を意識して伝わるように話をする力を互いに見合う中で高めることができた。

＜児童の振り返りから＞

- 言葉はあまり通じていなかったが言っていることは大体わかった。
- 友達と協力することや交流の楽しさを学んだ。
- 国がちがっても同じ気持ちや願いを持っていることがわかった。
- 台湾の人は日本のことをいっぱい調べていたし、台湾のこともよくわかった。国同士仲良くすることは大切なことなんだなあと思った。　　･･･等、

＜アートマイルの児童がこのプロジェクトで学んだこと＞

- 交流の楽しさを学べた。
- 絵で思いや願いを伝えられるということを知った。
- みんなで協力することの大切さを学んだ。
- 文化や生活の違いを学べた。
- みんなが願っていることを学べた。
- 他の国の人たちも同じ願いを持っていることを学んだ。　　･･･等、

②課題

台湾から完成した絵が戻ってきたときにはもう、卒業式が目前という時期であった。２月末には戻ってくる予定が、台湾側も絵を校門に飾り、完成を喜び、皆で鑑賞したいとの喜びからであった。卒業式の２日前に届き、卒業式準備に６年生の学習の成果として校内に掲示したため、ゆっくりと絵を前にプロジェクトのメンバーで鑑賞することができなかったことが残念であった。また、アートマイル事務局へ送ったあとに、他県の先生が絵を気に入ってくださり、この絵を題材に絵に込めたメッセージを感じ取る研究授業が公開研究発表会で行われたと聞いた。授業をした４年生の子どもたちが絵から伝わることを自由に想像し、読み解いてくれた学習の記録を送って頂いたが、もう子どもたちはいない･･･。できるなら卒業した子どもたちに、「君たちの絵に込めた思いや願いが多くの人たちに受け止め、理解してもらえているんだよ。」というすばらしさを伝えたかったと思っている。絵は描いて終わりではない。このあとも多くの人の目に触れて、心に何かを感じてくれることだろう。それは、自分たちが込めた思い以上に深いものを想像してくれる場合もあるだろう。そのような絵の広がりの驚きや絵の持つ力を感じ取らせたかった。

また、140 名の６年児童が、一斉に同じ相手と方法を変えて交流したため、ＴＶ会議やビデオレターを用いた直接交流は別のプロジェクトの子どもたちに限定して進めた。したがってアートマイルの子どもたちは絵に込めた思いや途中経過を直接相手に伝える機会を持つことがなかった。交流は相手がいることが大前提である。先方は選抜された４～６年生の少人数の生徒（３４人）がアートマイルもテディベアもＴＶ会議も関わり、こちらの子どもにとってはその中の一つという関わりであった。そのバランスの悪さが、子ども一人にとって深い交流になり得なかった原因であろう。